

8.前場農林部次長の調査

県農林部次長前場重信は、1972年度(昭和47年度)外務省の都道府県職員の現地派遣計画によりアルゼンチン・パラグアイ・ブラジル諸国を調査(移住者の活躍状況、中小企業の現地進出に伴う諸条件、工業技術移住の受け入れ状況、本県への技術研修員派遣希望など)をすることになり約1ヶ月間、南米3国を訪問した。

主なコースは、アルゼンチン(ブエノスアイレス)、パラグアイ(エンカルナシオン、アスンシオン、イグアス)、ブラジル(サンパウロ、ベレン、トメアス)の各地を回り、各地で大使館、領事館、移住地、日本から進出の企業等を訪問し調査した。前場は各国で痛感した要点のメモである。

アルゼンチンで感じたこと

1. 経済が不安定である。物価が年間60%上昇しているとのことであった。現在ドルの交換率は1ドル=900ペソ=300円。
2. ブエノス近郊の日系人は花の栽培者が多い。このような経済不安定の際には安定性がなく心配していた。特に資金の借入れをしている新しい移住者は借入金の返済がドル建のため困っていた。
3. この国は牛肉生産は多いが、輸出に回すため国内の消費は制限している。しかし、牛肉はキログラム当たり300円位であるから日本の10分の1で、普通の家庭で日本のように100グラムでなくキログラムで購入している。
4. 小麦も輸出に回すためパンの品質を低下している。
5. 魚肉はあまり食べないが、最近牛肉の消費制限もあり食べだした。
6. 日系人の花のビニール温室のビニールは日本のビニールに比較すると質は悪い。
7. 日系移民のうち30年以上のものと、6～7年位のものと間には相当の較差がある。
8. 現在の経済不安も1973年1月の大統領選挙が終われば安定すると国民は信じている。
9. 日系人の花は南半球の関係上温度が違うので、時期を異にして飛行機などで欧州に輸出している。

パラグアイ国で感じたこと

1. 国民の数が少ない(約250万人)ので、野菜などの国内消費に限度がある。現在、アスンシオンから1800キロ離れたアルゼンチンのブエノスアイレスまでトマトをトラックにより輸出していた。
2. 広大な土地があるので大豆、小麦などの栽培が計画されていた。
3. 特にイグアス地区では未開発の肥沃土が多く、牧場をして畜産の振興が可能である。
4. 資金と技術があれば将来の発展は確実である。

ブラジル国サンパウロ地区で感じたこと

1. この地区は移民も古いので(香川県でも藤沢さんのように移住60年になる)、成功している人が多く、家も立派に建っている。ほとんどの人が農業のみでなく自動車部品製造、鉄工所、不動産売買等をやっている。
2. 成功すると日本に旅行することを最大の楽しみにしている。一世は日本に何回旅行したかを自慢していた。
3. 南米各地とも同様で、特にサンパウロ近郊の養鶏場では鶏ふんが10キログラム約75円で売っていた。日本とは大きな違いである。鶏ふんで飼料の3分の1をとっていた。
4. 道路はよく整備され、車は交通徳をよく守っていたが、歩く人々の交通徳は案外守られていなかった。
5. 南北米とも同様であったが、家の庭はきれいにして、これを外の道路からきれいに見えるようにしていた。日本のようにブロックのへいなどをして外から見えないようにしていたのは少なかった。
6. この点は南米各地で感じたことだが、電話などの通信施設が非常に遅れていた。ブエノス、サンパウロなどの近郊でも70キロ位離れると通信施設がないのが多かった。

ベレン・トメアス地区で感じたこと

1. 今が一番建設の時期である。肥沃な広大な土地が豊富にある。今後発展の可能性は南米のみでなく世界中でこことパラグアイのイグアス地区以外にないと思った。
2. ピメンターの収穫作業は機械化が進んでおらず労働にたよっていた。灌水、収穫物の乾燥は機械化が一部進んでいた。
3. 香料作物を作っていたが、なお新しい香料作物の導入を期待していた。
4. 医療関係と教育関係を心配していた。
5. ベレン地区から3500キロも離れたサンパウロ地区までメロンをトラック輸送していた。気候が違うため、作る時期が違うので高く売れるとのことであった。



ベレン、山本峰雄さん(左)の
ピメンタ農場を視察

